

平成 17 年 9 月 20 日

情報科学研究科学術振興・広報委員会 御中

平成 17 年度前期「国際会議への派遣支援経費」への申請が採択されたことにつき、感謝いたしますとともに以下のとおり派遣内容をご報告します。

申請者 人間社会情報科学専攻 メディア情報学講座 助教授 森田 直子

国際会議名 Text images : from calligraphy to printing. Towards a semiotics of the ideograms

開催日・場所 2005 年 7 月 11-13 日 イタリア ウルビノ大学国際記号学・言語学研究所
(CENTRO INTERNAZIONALE DI SEMIOTICA E LINGUISTICA, Università degli Studi di Urbino/Piazza Rinascimento, 7/I-61029 URBINO)

当該会議において得られた知見および申請者の貢献

当学会はウルビノ大学記号学夏季セミナー（ウンベルト・エーコにより創設）の一環として、パリ第 7 大学の A.M. クリスタン教授およびトゥールーズ大学の J. デュランマット教授のコーディネートにより開催された。世界各国の手書き文書から印刷物にいたる文字の図像性、とりわけ文学・芸術におけるその重要性について学際的に討論され、とりわけ音声文字と表意文字の比較、後者の記号論的読みの可能性に焦点が当てられた。フランスから 10 名、イタリアから 7 名、ベルギーから 3 名、日本およびエジプトから各 1 名が参加した。発表言語は仏・伊・英語（申請者は仏語で発表した）。研究発表のテーマは、中国の書や詩画軸から日本の文字に関する民間信仰と書簡、近現代日本における縦書きと横書きの問題、アステカ文字、アラブのカリグラフィ、ヒエログリフ、中世キリスト教写本、西洋における視覚詩や表意文字的表記の試み（クローデル、ドートルモン、ミショー、カミングス、ル・クレジオ）、筆跡学、アメリカとベルギーのコミックまで多岐に渡った。

会議全体の総括として、現代に至るまでさまざまな文化圏で「絵文字」的な文字表現が意外なほど持続し普及していることに加え、書記実践において以下 4 点の特徴が見られることが確認された。書字と諸芸術分野（絵画、文学、建築、舞踏および身体表現、音楽）との深いかわり 書字形式の規範を超越しようとする方向性、西洋近現代の作家における書字行為・媒体の意識化と実験、西洋言語の（ツールとしての）「透明性」の乗り越え、すなわち活字・レイアウト・身体動作等による文字の不透明性の見直し、である。

申請者の発表は上記に含まれるもので、近代日本文学史を問い直す挑発的な作品を発表し続ける水村美苗による日本初のバイリンガル横書き小説『私小説 from left to right』の分析を中心として、日本語の縦書き・横書き、手書きとワープロ・パソコンの実践と文学との関係について発表した。日本文化については一般に書道など伝統的で異国趣味を喚起する分野が特に注目されがちであるが、インターネットを含む現代（大衆）文化や現代文学における書記の実状を含む報告に対して参加者の関心は高く、活発な討論が行われた。